

大学における文化芸術推進事業・中間報告会

「マイノリティの権利、特にSOGIをはじめとした〈性の多様性〉に関する知識と、それらを踏まえた表現倫理のリテラシーを備えたアートマネジメント人材育成プログラム」

報告者：山田創平

京都精華大学国際文化学部長・教授

なぜ「表現倫理のリテラシー」なのか

近代以降の表現の変化／拡大（「私小説」「プライバシー」「表現規制」「人間関係」「マイノリティ」「SNS」…）

昨今の表現活動／芸術実践／アートプロジェクトにおける、表現倫理をめぐる課題

いわゆる芸術系大学（本学も含む）における表現倫理についての教育の希薄さ

京都精華大学の建学の理念



1968年開学（五月革命の年）

学生数：約4000人

建学の理念は「自由自治」「人間尊重」（日本国憲法および教育基本法、世界人権宣言の骨子）

「われわれの大学は新しい画布（キャンバス）のように、一切の因襲的な過去から断絶している」（初代学長、岡本清一の言葉）

ダイバーシティへの取り組み

ダイバーシティ推進宣言 2018

京都精華大学は、自由自治を建学理念に掲げ、世界人権宣言にもとづく人間尊重を教育の基本理念とする大学として、学生・教員・職員をはじめとする全構成員が、互いの差異を通じてともに成長してゆく組織を目指します。そのために、本学ではダイバーシティを「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」と定義し、これを推進します。

年齢、人種、性別、身体的特徴、性表現など表面的に認識されやすいものから、国籍、宗教、家庭環境、出自、働き方、性自認、性的指向など表面からは認識されにくいものまで、私たちは1人1人異なる属性を複数持っているはずです。誰もが多様で差異がある、という考えに立ち、一部のバックグラウンドや属性を理由にした不自由、差別や排除がないキャンパス環境を、修学・教育・研究・就労の観点から活動方針に沿って着実に整えます。

現在の世界的人権課題（人類の持続可能性に関わる重要課題）

- 多様性（ダイバーシティ）の尊重
- マイノリティの権利擁護
- ジェンダー平等の実現（例えばSDGsの《目標5》）
- インターセクショナルリティ
- SOGI（ソジ）／SOGIESC（ソジエスク）
- グローバル・サウス
- ポスト／ネオ・コロニアリズム
- BLM（ブラック・ライブズ・マター）
- ダブル／トリプルマイノリティ」

...

すべては資本の論理か？

それだけではない。

動画による事業紹介（1）

〈2021年度：ネットワーク構築ゼミ〉

1. 菅野優香さんレクチャー「クィア・オブ・カラー批評—アメリカにおける非白人の知と経験」
2. ナオミ・リンコン・ガヤルドとダーシャ・チェルニシェバのプレゼン
3. カナダ・トロント在住の編集者、吉田守伸さんによるゼミ「しゃべりつづけるクィアたち——「LGBT先進国」カナダの黒人・先住民・有色人種によるアクティビズム」

動画による事業紹介（2）

〈2022年度：メディアコンテンツ制作ゼミ〉

1. 受講生と「引越し」にまつわるエピソードをシェアしながら、日々のモヤモヤすることを話し合った。アーティストの藪内美佐子さんにより演出・撮影され、編集された映像作品。

受講生からの反応（1）

- 身近な場面での差別、排除は気づきにくいものである。自分だけはそんなことはしてないと思い込みたいが、そんなことはなくて、偏見などから自由ではない。
- 日本のLGBTQ+コミュニティの現状は、人種や植民地の問題に対して批判的意識を持ちながら人と集まり協働するということが時にとっても難しいと感じていますが、紹介していただいたようなコミュニティのあり方は集まり方を考える一つのヒントになりました。
- 文章を通して、受講生の皆さんそれぞれの「痛み」を知ることができて、勉強になりました。自分一人では絶対に出会えない人、気づけない痛みを知ることによって世界が広がったと思います。
- 他の人（世代は関係なく）の考えていることを聞いたり、自分が話す場は（そこにたどり着くまでに困難はあるけれど）とても重要だと思った。（中略）自分と似たようなことを感じたり、考えたりしながら生きてきた人が目の前にいる…という状況がとても心強かった。

受講生からの反応 (2)

- 「〈偏見〉を〈正しさ〉として内面化している人に対して、どのようにすれば対話が可能か？」という問いについての先生方の回答（対話は難しいという前提からスタートせねばならないこと）もすごく納得がいくし、同じ悩みを持つ人がいるのだとわかった。
- 国際的な人権の視点、交差性からの制作者の視点、ラディカルな社会変革の視点を知った。
- 『人権』や『マイノリティ』について、ある程度知っている気ではいたが、自分が思うより根深い問題や考えなければいけないことがたくさんあると気づいた。
- マイノリティ性が大きなファクターとなる芸術鑑賞や評論において、クィア・スタディは必須の教養で、しかも刻々とアップデートが必要でもあると痛感した。
- 芸術系大学と、他の大学が連携して、もっとこうした作品（ここでは、グロリア・アンサルドゥーアの詩）に触れる機会を多くの人たちに届けていけたらとても良いと思います。
- 「第三世界のアーティスト」みたいに雑に括ってしまうことなく作家や作品を知る必要を改め実感しました。